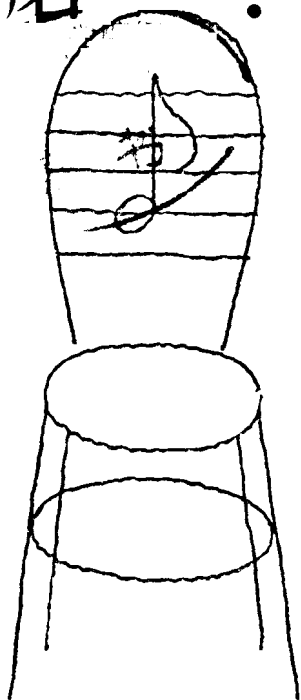


好きな歌
嫌いな歌
團伊玖磨



だん いくま

大正13年4月東京生まれ。昭和21年東京音楽学校（芸術大学）本科作曲科、同23年研究科卒業。25年NHK創立25周年記念管弦楽曲応募作品「第一交響曲」で特賞。41年、日本芸術院賞受賞。43年「正・続パイプのけむり」で第19回読売文学賞受賞。

主な著書は「音楽紀行」、小説「ニッポン・ミリタリマーチ」、随筆「パイプのけむり」シリーズ、「舌の上の散歩道」ほか。
日本芸術院会員。

好きな歌・嫌いな歌

昭和五十二年一月二十日 第一刷
昭和五十二年二月二十八日 第二刷

著者 團伊玖磨 編集人 笠井晴信

発行人 深見和夫 印刷所 凸版印

刷 製本所 協和製本 発行所 読

売新聞社 東京都千代田区大手町一

一七―一丁100 大阪市北区野崎町七

七丁530 北九州市小倉北区明和町一

一―一丁802 定価九五〇円

©一九七七年印刷 0095-72160-8715

「乱」・「落」本お取り替えます。

日本音楽著作権協会 承認 No. 317110

好きな歌・嫌いな歌
目次

夏は来ぬ	77
五月のうた	72
祝祭日唱歌	67
港が見える丘	63
肩たたき	59
はなさかじじい	45
この道	40
校歌	45
むすんで ひらいて	35
花のまち	32
日の丸の旗	28
蝶々	25
春の小川	20
さくら さくら	16
一月一日	13
始めに	9
と うさぎとかめ	53

知床旅情 81

襟裳岬 86

青い眼の人形 92

かたつむり 96

茶摘 99

ひこうき雲 103

城ヶ島の雨 107

ほたる 111

雨の歌 115

雨のステイション 126

夏の思い出 130

海の歌 134

雀の学校 140

橋はいつも 145

海ゆかば 151

虫の楽隊 155

桃太郎
161

ぞうさん
167

夕日と夕焼小焼
173

抜刀隊
177

男の純情
187

鳩ぽっぽと鳩
190

無情の夢
194

出船の港
197

帰って来たヨッパライ
201

浦島太郎
206

鉄道唱歌
211

電車唱歌
217

赤蜻蛉
224

夜明けのうた
228

軍艦行進曲
233

紅葉
237

真夜中のギター——241

故郷の空——246

28 番目の季節がちよつとだけ移りかわろうとしている今——250

かなりや——254

カチューシャの唄——258

冬の夜と冬景色——262

東京ブギウギ——270

待ちぼうけ——274

あなた——279

七里ヶ浜の哀歌——283

雪の降るまちを——287

お正月——291

あとがき——295

装丁

中森陽三
鈴木裕子

好きな歌・嫌いな歌

始めに

平均、人は何曲位の歌を知っているものだろうか。ふとそんな事を考える時がある。

もとより、中には明治・大正・昭和の童謡を皆知っていると言う人もあるだろうし、軍歌なら、いや流行歌なら何でもござれの人もいるだろうし、シューベルトの歌曲を片端から覚えている人もいるだろう。然しこれは例外。

そして専門の歌手も例外である。僕の考えるのは、平均的日本人が何曲位の歌を知っているだろうか、という事である。

日本人は平均六本の虫歯を持っているという。してみると、日本列島の上には、六億六千万本の虫歯が蠢うごめいている事になって、一昔前に虫歯も良い歯も十把じゅうば一絡じげにして引っこ抜いて総義歯にしてしまったクリーンな僕から見れば、何とも薄気味の悪い話である。

然し、歌の話と虫歯の話は一寸ちがう。六億六千万本の虫歯はそれぞれ一本宛ずつちがう歯だけれども、皆が知っている歌は共通なものが大部分だから、何億曲の歌が覚えられているという訳では無い。歌は虫歯とは異って、数は少くとも、皆の共通財産なのである。

心を静めて考えれば、百曲やそこいらは誰でもが歌を思い出す事が出来ると思うが、平均的日本人にとってすぐさま思い出せ、唇にのぼる歌は、大体五、六十曲が良いところだと思う。それも、二番の歌詞だけは忘れていたり、節の一部が曖昧だったりするものを含めてである。

さて、そうして覚えられている歌は、音楽的に分類すれば、西洋の長・短音階か、日本独自の俗楽の陽・陰の旋法か、その中間の所謂五声の長・短の音階で出来ているものが殆んどで、極く稀に雅楽調のもの、ギリシャ旋法風のものが散見される程度である。拍子は2拍子、4拍子、3拍子、僅かの $\frac{6}{8}$ 拍子が見られる程度で、5拍子、7拍子のものさえ殆んど無く、要するに皆の覚えられる歌は、音楽的には誠に単純なものに限られている。

ジャンル別に見ると、わらべ歌、童謡、教育教材、校歌、寮歌、応援歌、社歌、市歌、県歌、国歌、軍歌、民謡、新民謡、邦楽からの流出曲、流行歌（色々な種類はあるが）、テーマ・ソング、コマーシャル・ソング、やさしい芸術歌曲、外国曲等で、人が生きるところ、集まるところ、指向するところに歌が生まれる筋道がえらくはっきりと判る。

作られ方は、自然発生（？）的なもの、芸術家の自発性によって作られるもの、応援歌、軍歌のように目的性が明確なもの、流行歌のように商業主義によって制作、販売されるもの等がある。

歌を覚え、愛する事は、人間の共通感覚を是認し、その環の中に立つ事に依って生きている事を確認する事に他ならない。

草の種子が飛んで来ても、それが発芽し、育ち、花を咲かせる土壌と、全く発芽も育ちもしない土壌があるように、そして、別のB種の種子は、A種の種子が発芽も育ちもしなかった土壌を好んで育ち、A種の種子が発芽し育った土壌では育たない事が、間々あるように、AとBとの歌が聞こえて来ても、それが発芽して人の心の中で育つ場合と、発芽も育ちもしない場合がある。

Aという歌をBよりも皆が好きであるとすれば、皆がAの歌を愛する共通感覚を歌以前に持っている事であり、Bの歌を好まないという共通感覚を持っている事であり、その共通感覚を土壌としてAの歌は人の心の中で育ち得るのである。そうであってみれば、歌を思う事は、共通感覚を媒体としながら人の心を思う事である。

この本で、僕は、誰でもが知っている歌を素材に、人の心の綾あやとその不思議さを感じて行きたい。題して「好きな歌・嫌いな歌」但しこれは、平均的日本人の知っている、共通財産である歌という意味である。だから、外国の歌でも、日本人の心の中に根を下ろし、生きている歌は取り扱ふし、童謡も、流行歌も、我々の共通感覚の中に生きているものは何でも登場して来る筈である。但し、この本には、軍歌と寮歌は殆んど出て来ない。何故なら、その殆んどは、好きとか嫌いとか言う以前に、歌として考えられぬ程粗野なものが多いからである。

従来、歌の考現学が考えられる場合、歌詞の方にばかり気を取られる向きが多かった。歌詞も大切だが、メロディーの大切さを僕は十分に知っている心算しんさんだし、その意味

で、従来の考現学とは異ったアングルから筆を進めたいと思う。

日本人の共通感覚。その謎なぞを解く事は、日本という不思議な国の謎を解く小さな鍵かぎになるかも知れず、ひいては、日本の現在から将来にわたっての動きを予知する一つのレ
ンズになるかも知れない。

何故なら、日本丸は、日本人の共通感覚が動かして行く舟なのだからである。

一月一日

今は祝日、祭日は学校が全然休みだから、学生、生徒は家に居るなりどこかへ遊びに行くなり自由で良いが、昔は、四大節と言われた一月一日の四方拝、二月十一日の紀元節、四月二十九日の天長節、十一月三日の明治節には学校に行つて、祝賀の儀式に出席しなければならなかった。この式と言うのが何とも詰まらなく、学校側もその詰まらなさを知っていたから、出席して詰まらなさを我慢した子供には、紅白の安物の落雁ちやうがんのような乾菓子に申し訳に餡の入った御褒美ごほうびを呉れるのだった。その菓子は美味くも何とも無かった。子供の頃から意味の無い儀式を大嫌いだった僕は、腹が痛い風邪を引いたのと嘘をついて、勉強に關係の無いこれらの日々は休んだが、稀に行かなければならぬ事になって菓子を貰つても、詰まらぬ感じの連想が付いてしまったそんな菓子を食べる気もせず、犬にやったり捨てたりした。粉っぽい菓子は犬も食わなかった。

校長が下級の大礼服を着用して、鞠躬きくう如じよとして罷り出でて、その日だけしつらえられた講堂の壇上中央の、変な両開きの幕が張った粹すいのようなものに近付き、慎み畏かしこみながら、カーテンの紐ひものようなものを手繰ると、両開きの幕が開き、御真影と呼ばれていた、軍装された天皇陛下と、イウニングのようなものを召された皇后陛下の写真が出現

し、校長は益々平身低頭、全校の職員生徒が最敬礼をするのである。現実の兩陛下が出現なさるなら判るが、写真という印画紙に最敬礼する事が全く理解出来なかつた僕は、この講堂に集まっている全校の人間が、発狂しているか野蠻人なのか、どちらだろうかと考えて、せめて自分だけでも最敬礼をすまいと頭を高くしていた事を覚えてゐる。

最敬礼が終わると、祝日唱歌の斎唱があつて、校長の「教育勅語」の朗読があつて、訓話があつて、又御真影を閉めて、大体式は終わるのだった。これでは面白からう筈が無い。

さて、

“年の始めの例として”

で始まる一月一日の祝日唱歌は、貴族院議員、司法大臣、出雲大社宮司等を歴任した千家尊福男爵の作詞、作曲は、宮内省楽部と東京音楽学校を兼任されていた上真行教授になるものだった。官報第三〇三七号附録として明治二十六年八月に告示されたもの。岩波文庫の「日本唱歌集」に依れば、二番の“初日のひかりさしいで、四方に輝く今朝のそら”は、官報発表当時は、“初日のひかり明らけく、治る御代の今朝のそら”だったと言う。我々の知っていた歌詞に改められたのは大正二年の文部省告示に依つてだそうである。もとの歌詞には明、治の二字が詠み込まれていたので、大正になって変更が行われたわけである。

いずれにしても、子供達は、“年の始めの例として、尾張名古屋の大地震、松竹ひっく